

令和6年度学校評価計画書（中間）

学校名（宮内小学校）

評価計画					自己評価					学校運営協議会 委員評価コメント	改善方策
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標値	中間 8月	最終 2月	達成度	評価	結果と課題の分析		
確かな学力の定着 (自ら学び合う子)	各教科等の目標を達成するための学びを定着させる	<ul style="list-style-type: none"> 全ての単元で目標にもとづいた評価を行う。 特別支援教育の考え方を生かした個別最適な学びを提供する。 体育の授業改善を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学びが楽しいと捉える児童の割合（アンケート） 適切に振り返る力の向上を自覚する児童の割合（アンケート） <p>【校区共通項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると捉える児童生徒の割合（全国児童生徒質問紙） <p>【市共通項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新体力テストで①立ち幅跳び、②シャトルランの県平均を上回る。 	100% 80% 95% ①80% ②80%	90% 85% 83% ①69% ②45%		90% 100% 87% ①86% ②56%	B A B C	<p>【評価】・学びが楽しいと感じる児童は90%で、振り返る力の向上の児童アンケートでは肯定的評価が85%であった。児童が主体的に学べる授業作りや支援が進んでいると考える。引き続き、児童がより適切に自己分析ができるように取り組んでいく。</p> <p>・児童につけたい力と評価規準を示すことで、指導と評価の一体化を意識して取り組むことができた。</p> <p>【特支】・支援が必要な児童へのアセスメントを特別支援教育部として行うことができず、意見を反映させることができなかった。</p> <p>【体力】・体育時や学級レクなど日々の取組により一定の成果が見られた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学びの楽しさだけでなく、学力の定着状況も評価項目・指標に加えるとよい。評価項目・指標は、第三者が追認可能な表記が望ましい。別添資料の添付もあってよい。 与えられる課題や目標だけでなく、内発的動機付けに基づく課題設定を児童自らがを行い、課題解決していくことで、より主体的な学びにつながるのではないかと。 教員だけでアセスメントをするのが難しいのであれば、作業療法士等の専門職の支援・分析・意見を聞くこともよいのではないかと。 体育の授業改善に限定せず、体育的な活動における取組とすると改善方策と整合性があるのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童がより適切に自己分析ができるように「ふりかえりのルーブリック」を作成し、児童の主体性をさらに伸ばし学びにつなげていく取組を行う。 2・3学期に向けても、つけたい力を明確にし、学年で評価基準を検討し、児童とも共有する。 アセスメント（支援計画等を見て難しいところを考える）やワークシートの検討を特別支援教育部が中心となって進め、各学年に提案する。 新体力テストの結果には、個々の結果の差が激しく、全員が体を動かす機会の設定が必要である。
自律と協働の力の育成 (心豊かな子)	・学校の中で一人一人が認められ活躍できる場を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> PBS の日常的な実践 特別活動を計画的に実施する 	<ul style="list-style-type: none"> 自分にはよいところがあると捉える児童の割合。（アンケート） <p>【校区共通項目】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学級から議題を代表委員会に提出し、話し合う数。 	90% 90%	87% 33%		97% 37%	B D	<p>【PBS】・各クラスでの良いところ見つけの取組により、87%の児童が自分よりよいところがあると感じているが、学級によって取組の差がある。</p> <p>【特活】・委員会活動を中心に、自分たちの学校生活をよりよいものにしていくという取組が進んでいる。代表委員会への議題提案は十分ではなかった。児童や教職員に代表委員会とはどのような議題を話し合うのかということの周知が不十分だったことが目標を達成に至らなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 他者からの評価とともに自己開示の機会を増やすのもよいかもしれない。好きなこと、関心のあることなどを開示し、認められる経験を積む中で、自信や心理的安全性や弱さの開示までつなげるとよい。自己肯定感とともに自己有用感をもてるような取組を。 特別活動は、委員会活動だけではなく、低学年も参加できる学校行事を取り上げて評価項目・指標を設定することも考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各クラスで行っている児童のよいところを見つけるアクティビティを紹介し合う場を提供する。特別支援教育部で裁量の時間に取り組める自己肯定感を上げるアクティビティを提案し、月1回はできるようにしていく。 委員会や学活を中心に、児童自ら学校生活をよりよくするための取組を考えて実行していることを意識的に評価し、自己肯定感の向上につなげていく。 職員研修を行い、代表委員会で各学級からの意見が活発に出せるように、各担任から代表委員会を意識した声かけや学活での話し合

									た原因だと考える。		い活動の充実を図る。
地域、保護者から信頼される学校	・情報発信の仕組みを整える	・総合的な学習の時間を中心に、児童が地域と関わる場をつくる ・学校の教育活動の発信をHP、通信で計画的に行う	・総合的な学習等で全学年が地域の方と関わり合い学ぶ機会をつくる ・本校の取組への満足度。(アンケート)	100%	67%		67%	C	【総合】・地域との関わり合いを意識して取り組めた学年とそうでない学年があり、取組に差があった。	・地域に出ていくような授業があるとよい。もっと地域と学校が手を取り合うような取組が増えてほしい。 ・地理、歴史、仕事、暮らし、防災、自然といった分野は、地域と絡みやすいのではないかと。 ・総合的な学習の時間だけでなく、生活科も方策に加えるとよい。	・夏季休業中の熟議でいただいた意見を参考に、年間計画を再確認し、2・3学期に地域と連携できる単元について検討・実施する。 ・引き続き、計画的な情報発信を行うとともに、タイムリーな情報発信を心がける。
職員の充実感を高める。	◎分掌の見なおしと運営参画の機会を増やす。	・児童基点とつけたい力の重点化により業務の軽重を職員が判断する機会をつくる。	・業務改善が進み、働きがいがあると捉える職員の割合(アンケート)	90%	83%		92%	B	【職員】・各分掌でカレンダーを作成し業務が見える化したことで見直しをもって業務を遂行できるようになってきた。学年や分掌で相談しながら、時間を意識して効率よく業務を進める職員が増えてきた。	・職員の本務である授業改善、校内研修の充実の方策も見直しに加えるとよい。 ・先生達には余裕をもって子ども達と接することができるようになってほしい。心のゆとりがないと、子ども達が安心して過ごせない。	・業務の軽重の判断については、引き続き、各主任会で児童につけたい力を基点に意見を出し合っていく。

「達成度」＝報告期の達成値／目標値 「評価」＝目標値に対する評価の割合 (A:100%, B:80%以上, C:60%以上, D:60%未満)